

## 特別寄稿

全学共通科目総合系科目・コラボレーション科目

# ボランティア論 ー知ること、考えること、行動すること ～コラボレーション科目であることの意義～

ボランティアセンター長／コミュニティ福祉学部教授 平野 方紹

立教大学におけるボランティア活動の歴史は、記録に残っているだけでも、関東大震災（1923年）で、教会が中心となり学生たちが被災者支援に取り組んだ約1世紀前まで遡ります。ボランティアという概念も言葉もない当時、学生たちは「社会奉仕活動」として被災後の東京で活動していました。このように1世紀のボランティア活動の歴史を有する大学はわずかで、本学はわが国の学生ボランティア活動の嚆矢の一つとされています。

また、今日、学内で多様なボランティア活動が展開されており、2014年にはボランティアセンター（以下：「センター」）が、ボランティア活動推進の功績で厚生労働大臣表彰を受けるなど（全国の大学で4校のみ）、その活動の豊かさや質の高さは高く評価されています。こうした基盤には、本学が基軸とするキリスト教精神や、「学びを人々へ」という建学理念を実践するという学生の姿勢があります。こうした歴史や風土を踏まえて、大学のボランティア活動推進を担うセンターとして、その主要な事業として実施しているのが、全学共通科目である「ボランティア論ー知ること、考えること、行動すること」です。

学生支援組織であるセンターが企画・運営・実施することから、実践指向科目として、現実と切り結び、そこにどう向きあうのかを問いかけるというスタンスで授業は組み立てられ、受講する学生が自分と社会についての内省を深めることを基調としています。さまざまな人々の多様なニーズに対応し、いろいろな実践形態が求められるボランティア活動には、固定的な定義、確実な方法や技術はありません。現実をリアルに直視し、既成の枠にこだわらない柔軟な思考が求められるため、絶対的な「正答」を望むのではなく、「主体的に考える」ことが大事です。その意味で、「知ること、考えること、行動すること」をテーマとして、授業が構成されています。

## ボランティア論の目標と特徴

この授業ではボランティアを、福祉や教育などの狭義のボランティア活動ではなく、ボランタリー（自発性・主体性）に基づく社会における活動という広義としてとらえ、既成の価値観にとらわれず、みんなで現状を変えてゆく力を育むために「新しい価値観

の創造・共有・啓発」を授業目標として設定しています。そのため、社会のさまざまな分野に焦点を当て、その最前線で活躍している方々をゲスト・スピーカーとして迎え、今しか聞けない、そのゲスト・スピーカーでしか聞けないお話をいただいています。

表は 2020 年度の授業の実施計画です。全体の 2 / 3 をゲスト・スピーカーが占め、残り 1 / 3 もボランティア活動に参加した学生の報告など実践の内容となっています。

ゲスト・スピーカーは、主に次の方々をお願いしています。

- ①先駆的なボランティア活動を実践している団体の役員
- ②社会貢献活動（CSR）や地域活動に積極的に取り組む企業
- ③社会問題に取り組んでいるジャーナリスト
- ④社会にコミットメントしている実践的研究者

表：2020 年度「ボランティア論－知ること、考えること、行動すること」実施状況

	氏名	現職	専門分野（テーマ等）
担当講師・ゲスト・スピーカー	【コーディネーター】 平野 方紹	ボランティアセンター長、立教大学 コミュニティ福祉学部教授	社会福祉原論（現代社会と福祉）、 公的扶助論
	【兼任講師】 豊永 はるか	日本財団学生ボランティアセンター	ワークキャンプ、国際交流、災 害ボランティア等
	磯田 浩二	NPO 法人 good! 代表	ワークキャンプ、ユースワーク
	森田 泰進	読売新聞 記者	ボランティア体験を言葉にする
	中村 真博	立教大学コミュニティ福祉学部博士 課程後期	パラリンピックとしょうがいス ポーツ
	大倉 智	株式会社ドーム取締役 執行役員 CSMO	企業の社会的な取り組み
	宮川 豊史	東久留米市議会議員	支えること、支えられること
	井上 綾乃	一般社団法人ピースボード災害支援 センター	災害ボランティアにおいて学生 にできること
	藪本 雅子	フリーアナウンサー (元日本テレビアナウンサー)	* ソーシャルな観点から仕事をす る－ハンセン病報道
	福井 崇人	京都造形芸術大学客員教授一般社団 法 2025PROJECT 代表理事	ソーシャルデザイン

これらゲスト・スピーカーには、活動（事業）紹介だけでなく、なぜ活動に取り組もうとしたのか、どんな経緯があって実現したのか、といったプロセスやゲスト・スピーカー自身の経験や想いを、個人的な想いでも良いので語ってほしい、その人生を語ってほしいとお願いしており、ゲスト・スピーカーの皆さんからは「生々しい」お話をいただいています。また、活動に参加した学生や卒業生からも、その活動だけでなく、自分自身の変化や成長を語ってもらっており、受講学生にとって身近で具体的な問題提起となっています。（2020 年度は、学生の構内立ち入りが制限されたため、陸前高田における野球部やバレー部の学生の活動については野球部監督やバレー部顧問からの、被災地支援やセンター活動については担当職員からの説明となりました。）

これは、期末試験（レポート試験）の一部ですが、受講学生の想いが見えてきます。

「ボランティアといっても、何か偽善的だと思っていたが、自分が何を考え、どう行動するのかを考えることだと分かった」

「自分は受け身でしか行動できないが、同じ学生が現実に真摯に向かい合っていることを知り、自分を問い直す機会になった」

「企業は金儲けのためだけだと思っていたが、経済だけでなく地域や社会を視野にして活動するものと知り、就職活動に前向きになれた」

「社会を変えることなんてできないと思っていたが、まず自分が変わることがその第1歩ということが分かったのは貴重な学びだった」

「世の中の出来事を他人事と思っていた。しかし、その現場には人はいるのだし、その思いへの想像力が薄かった。もっと身に付けたい」

## 学外との連携とその効果

センターでは、授業の企画・運営・実施を、日本財団学生ボランティアセンター（略称：Gakuvo）と連携して取り組んでいます。これは全国組織である Gakuvo と連携することで学内の視点だけでなく、広い視野から講義内容を検討することができ、そのリソースを活用でき、全国や海外で展開されている活動と結びついた授業内容を提供することができました。一方、Gakuvo からは、大学と連携して授業を担当することで、大学生のボランティアに対する意識、ニーズ、動向をリアルに、定点的に把握できる事業推進にとって有益であり、引き続き実施していきたいと評価されています。こうした数年にわたって授業を実施する例は全国的にも稀少で、貴重な実験的取り組みとなっています。

また、ゲスト・スピーカーとしてお迎えした各団体や企業の方々は、「ダイレクトに自分たちの活動や想いを伝えることができる。」「インターネットなどで団体や企業の活動を伝えるにしても、外部から媒体を介してでしか伝えられない。そこでは、一番伝えたい、想いや熱意が伝えられない。その点、大学の中で、直接自分の言葉で大学生に語れる（反応が分かる）場は貴重であり、こうした形での社会貢献活動を定着させることが企業の存在意義を高めることとなる」「顔を見て話せたことで立教が身近になった」とのお話をいただいています。こうして学外との連携を密にはかれることが「コラボレーション科目」の意義であり、強みであると考えています。

## 全カリ授業としての「ボランティア論」の意義

履修者は、例年 400～500 名の希望者がいるため抽選で 200～300 名に絞られます。履修は 2 年次以上で、学年構成は、例年ほぼ 2 年次 45%・3 年次 40%、4 年次その他（セカンドステージなど）15% です。2 年次以上ということで、授業での問いかけも「大学としての」「学生としての」という視点が鮮明となり、また、履修している 3 年・4

年次生にとっては進路や就職といった現実に向かい合う時期に、人生を考える「導きのヒント」となるという声もあります。各回の授業の出席率は約90%（全回の2/3以上の出席が単位取得条件）と高く、多くの学生が真摯に授業を受けています。

「ボランティア論」という科目は、コミュニティ福祉学部の専門科目にもありますが、センターの「ボランティア論」は全学共通科目ですべての学部を対象にしています。これは、社会と自分がどう関わるかはすべての学部の学生に共通の課題であるからです。

ボランティア活動は、特定の分野に限られず、その内容はさまざまです。それだけに学部を越えて、さまざまな背景を持った学生たちが集まって構成する全学共通科目で取り組むことはセンターとしても意義があります。

さまざまな人が、その持てる力で、それぞれの条件下で活動するものがボランティアとすれば、多くの学生が接するチャンスを提供すべきでしょう。また、ボランティア精神を身に付け、自分自身を内省することは、それぞれの学部での専門の学びの土台となると考えています。

追伸 2020年度の授業はすべてオンラインとなり、画面越しでリアルに伝えることができないのは残念でした。しかし、思わぬメリットもありました。これまで池袋キャンパスで開講していたため、新座キャンパスからの履修は物理的に困難で受講学生は少数でしたが、今年度はオンラインということで新座キャンパスから例年になく多数の受講者がありました。

ひらの まさあき